

高尾山 歴史の散歩道 42

明治大学博物館 外山 徹

大本堂その2



建立百年を経て古色を帯びてきた大本堂

明治十九年（一八八六）九月、台風がもたらした大雨により崖崩れが発生、薬王院本堂が倒壊した。当時の本堂は現在の書院の位置にあった。航空写真で確認すると、その裏山は奥之院の南側の斜面である。その崖が大木を巻き込みながら一気に崩れ落ちたということである。同じ台風により飯縄権現社脇の崖も崩れて石段が落ち、薬師堂も被害を受けていた。

再興への着手

こうした状況をうけて、翌明治二〇年一月に第二四世の山主として晋山したのが、近代における高尾山中興を担うことになる百済範真（佐伯隆範）師であった。京都海住山寺から転出した範真師は元々薬王院の副住職も務めており、この窮状にあつて心中に期するものがあったにちがいない。

まずは三月付で本堂その他の諸堂宇修繕を目的とする勸進帳の文面が作

成されたが、範真師の頭に浮かんだ再興の第一手は東京での出開帳であった。それ以前から江戸での出開帳は堂宇修繕を名目とするのが常であったとは言い、実際には莫大な物入りに対し大幅な黒字を期待できるものではなかったが、それでも、「久しく廃絶なりし講社を再興し、無縁の信徒を増殖せんには、東京に出開帳を執行するのほかに法なし」というのが範真師の判断だった。堂宇の造営もさることながら、「信徒は日々々々減少し、ほとんど衰微の極み」近來は高尾山を知る人さへ十中の九なし」という状況を何とかしなければという意識は相当強かったにちがいない。

実際、寺社の檀那場として江戸・東京の存在は大きい。高尾山の場合地元西多摩への信徒集住の傾向が強かったが、それでも江戸後期の檀家帳では四分の一が江戸の在住者で占められていた。

東京出開帳

しかしながら、巨額の経費を要する出開帳実施はおいそれとは決まらなかった。法類の中でも有力な成田山新勝寺や川崎大師平間寺、また、東京の信徒とも協議が重ねられ、範真師自ら度々東京との間を往復している。開帳場の選定も紆余曲折の末、深川公園不動堂が候補地となり、一月二三日、来る明治二十一年四月二八日から六月一日まで出開帳を執行することを神奈川県宛に願している。年が明けて正月から二月にかけては東京の成田講、富士講の関係者を回つて出迎え・見送りの協力を呼びかけ、二月末から三月にかけては要人への挨拶、開帳場を使う什物の奉納予約を取り付け、従者の衣装などの手配もなされた。

さまざまな下準備を經ていよいよ本尊出立の四月二二日は前日までの悪天候が一転、好天に恵まれた。この吉兆に範真師

も「昨日来大雨のところ、本日に至り好晴と相成り感涙せり」と記す。本尊と山主の一行は正午に山上を出発。山麓の不動院前で地元関係者数百人の歓待をうける。甲州街道を進む行列への見送りは、「小名路（新旧道の追分付近）よりは凡そ千人余の人となる」と、陸続と人々が繰り出し、「八王子町に至れば立錐地なきに至る」大盛況となった。三日後の二五日、東京入り際に際しては各講中が幟を押し立て、山車を牽き

「その盛事なることは到底筆紙に尽し難き古今未曾有の出迎えなり」「神田（神田明神）・山王（日枝神社）の両大祭合併よりも、なお甚大なり」という盛況だったが、その背景には範真師の周到な事前準備があった。

この出迎えの様子は新聞各紙の紙面を賑わし、二八日の開白には「本日は好晴につき群参」「日参するもの二千五百名申込」と、出開帳は東京市

民に対し高尾山の存在を大きくアピールすることになった。一週間の日延べの後、六月八日に閉幕。範真師も「今般の出開帳は先ず盛大の結果なり」と総括するが、収支は赤字であった。それでも、「是よんどころ無き仕合いなりに」と結ばれた言葉からは、出開帳の収支によつて修復料を工面できずとも、その後の信徒獲得に充分な手ごたえを得たという実感が伝わる。

大本堂の再建

とは言い、資金の確保は必要である。勸進が始まって間もなく、高尾講の中でも大きな組織である馬込元講による本堂再建費用の寄附は、前にも紹介した明治二一年の記念碑に明らかである。馬込元講は現在の大田区馬込地区を本拠とし、北は目黒・品川区、南は川崎・横浜まで枝講の連なる大きな講中であつた。また、東京出開帳準備の過程でも方々から

寄付のあつたことが日記の端々に記されている。明治二二年には愛宕の鏡照院に出張所が設けられ、東京での布教拠点とされた。

二三年の三月二日頃から五月一〇日にかけて今度は高尾山内で居開帳が執行された。これは東京出開帳の折に地元信徒との間に約束されたものだったが、範真師は本堂再建を目的に地元名士にはたらきかけ、八王子有喜講を結成していた。その講員数は千名という。前年の八月には甲武鉄道が八王子まで開通する見通しとなつており、川越、所沢、熊谷、本庄、深谷（以上埼玉県）、高崎（群馬県）、横浜他に案内の立札が立てられるなど、関東一円からの来山が期待されていた。

翌二四年三月には神奈川県宛に堂宇保存金の降賜願が提出され、聞き届けとなる。この保存金は直接本堂再建費用に充てられたわけではなかった

が、以降、東京府に移管後も受給が続く安定した資金となった。

再興にあらゆる手段を尽くした範真師であつたが、激務は師の身体を蝕んでいった。二七年一月付の文書では畑中秀恵師が代理の署名をしており、翌二八年に山主を交代した。秀恵師の下、新本堂の再建が具体化した。二九年一月付の設計図面が残り、三〇年一月には東京府から建設の認可を受けている。新しい本堂は旧薬師堂の跡地に七間（一二・七メートル）四面と、旧本堂（九間×七間）に近い規模で構想された（現在は両翼が拡張されている）。元あつた三棟の内、護摩堂は奥之院の位置に、大日堂は同じ平地の東端へ移された。棟梁を務めることになった小町三郎は三〇

才を過ぎたばかりの若さで、その力量が不安視される一幕もあつたが、総樑素木造りで欄間彫刻も見事な堂々たる大本堂が

構想されていた。

薬王院文書の中には明治三一年（一八九八）付の「諸講社講元世話人名簿」という簿冊が残る。東京市はじめ関東一円の世話人氏名が書き上げられているが、再興に尽くした講社組織の回復が一定程度達成された証である。その年、山主は二六世志賀照林師に交代している。

三三年一月二一日に上棟式、翌三四年四月二一日落成式が執り行われた。ここに維新以来の衰勢を挽回し、近代における高尾山隆盛の基が確立された。大本堂の落成はそれを象徴する新たな世紀の門出であつた。

おことわり 史料の引用については、読みやすく原文に手を加え、適宜読み仮名を付しています。

《参考文献》
小町和義「高尾山の建築について」（『多摩文化第二四号武州高尾山その自然と歴史』一九七四）